

展 望

時間的展望に関する文献的研究

都 筑 学*

我々は、自己の将来にさまざまな目標や希望を持ち、そして、それらを実現しようと努力する。その際、立てられた目標や希望の実現に向けて、我々がどのような行動をとるかは、目標や希望の具体的な内容によって決定される。このように、自己の心理学的な未来は現在の我々の行動を制御し、組織化するような力動的な役割を果たす。

このことは、古くは 1930 年代に Israeli が行った、心理学的未来の展望と現在の情緒との間の相互連関についての一連の研究によって明らかにされている。理論的には、Frank (1939) が初めて時間的展望 (time perspective) の概念を提出し、文化的に決定された時間性 (temporality) に関する態度および過去や未来の間の力動的な相互作用が現在の人間の行動に影響を与えると主張した。次いで、Lewin (1942) は、時間的展望を場の理論における生活空間の要素のひとつとして位置づけ、個人の生活空間が現在だけでなく未来や過去をもその中に含んでおり、個人の時間的展望とモラルとの間には密接な関連があることを示した。その後、1950 年代に入り、時間的展望と非行、社会階層との関係を明らかにしようとする実証的な試みを初めとして、時間的展望の構造や意味を明らかにしようとする多くの研究がなされるようになった。さらにまた、臨床心理学の分野からも、Allport (1950) や Maslow (1962) などを初めとして、多くの研究者から、現実の人間生活において未来が果たしている重要な役割が指摘されてきた。

このように時間的展望は、人間の行動を理解するうえで重要な概念であると言うことのできるものである。それゆえ、時間的展望を研究するための多くの研究技法が開発され、年齢、パーソナリティ特性などの主体の要因との関連が検討されてきた。しかしながら、現状を見るならば、研究者間に十分な共通理解がなされていないために、研究の相互関連が不明確であり、研究成果が完全に統合されていないという問題が存在している。このような状況の中で、時間的展望の概念についての理解を深

め、研究を発展させるために、従来の諸研究を系統的に検討することは意義深いことだと思われる。そこで本稿では、時間的展望に関する従来の心理学的研究を概観し、概念や構造、研究方法、現実の諸要因との関連の視点から分類、整理を行い、時間的展望研究の到達点と問題点を明らかにし、そしてまた、今後の研究方向を展望することを目的とする。

1. 時間的展望の概念・構造

1) 概 念

時間的展望は time perspective の訳語であるが、個々の研究者はこれ以外にも time orientation, temporal orientation, temporal perspective, temporal experience などの用語を、十分に定義しないまま、それぞれ微妙なニュアンスのちがいを伴いながら用いている。そのために、Wallace & Rabin (1960) によって指摘された「時間的展望の概念定義が曖昧である」という状態は、今日もそのまま続いている。

ここでは、従来の研究においてなされた概念定義の中から代表的なものを取り上げて検討することによって、時間的展望の概念についての理解を深めてみたい。

最も一般的な定義は、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」(Lewin, 1951) である。これは、主として時間的展望の認知的な側面を定義したものである。同様なものには、「個人的な未来のでき事に関する時間的調節と配列化」(Wallace, 1956) がある。この 2 つの定義の違いは、Lewin が時間的展望を過去と未来の両方を含んだものとして捉えているのに対して、Wallace は時間的展望を未来に限定して捉えている点である。特に未来という点を強調する場合に、future time perspective という用語が用いられることがある。また、「現地点で知覚された地位との関連における過去および未来の評価」(Hultsh & Bortner, 1974) は、時間的展望の情緒的な側面を定義したものである。

これらの定義からわかるように、時間的展望には、個

* 大垣女子短期大学

人が自己の過去や未来にどのようなでき事を想起あるいは予想するかという認知的側面と個人が自己の過去や未来に対してどのような感情を持っているかという情緒的(態度的)側面の2つが含まれている。研究者の中には、両者を区分し、別々の用語を用いている者がいる。例えば、Lessing (1972) は cognitive な側面と cognitive-motivational な側面とを区別し、Lamm, Schmidt & Trommsdorff (1976) は認知的要素としての future time perspective と態度的要素としての future orientation とを区別している。

本稿では、時間的展望 (time perspective) の概念を最も広義の意味としてとらえる立場に立つ。すなわち、時間的展望の中に認知的な側面としての狭義の意味での time perspective と情緒的(態度的)な側面としての time orientation や time attitude が含まれると考える。

2) 構造

(1) 認知的側面

1. extension (広がり) Wallace (1956) が最初に定義して使用したものであり、「概念化された将来の時間的範囲の長さ」を指している。類似の概念には、action time span (LeShan, 1952), temporal extension (Cottle, 1968), extensity (O'Rand & Ellis, 1974), subjective life expectancy (Farnham-Diggory, 1964) などがある。これらはいずれも研究技法のちがいによる用語の差異と考えてよいものであり、例えば、tell-me-a-story によって測定された extension は慣例として action time span と呼ばれる。Wohlford (1966) は、extension を過去と未来の両方向に向かったものであると考え、互いに異なる用語を用いることを提唱し、過去への extension を retrotension, 未来への extension を protension と名づけて区別している。同様に、Epley & Ricks (1963) は、action time span を過去の方と未来の方に分けて考え、それぞれを retrospective, prospective と呼んでいる。extension は、通常主に年数を指標として用いられるが、Klinsberg (1967) や Teahan (1958) は、言及されたでき事のうちに現在、過去、未来のいずれが多く出現し、優勢であるかに着目して、predominance という用語を使っている。

2. density (密度) Kastenbaum (1961) が最初に使用した用語であり、「個人が未来に予想するでき事や経験の数」を意味している。Rizzo (1967) は、文章完成法を用いて、未来だけでなく過去における density を捉えようとしている。

3. coherence (一貫性) Wallace (1956) が最初に用いたものであり、「概念化された未来の中における組

織化の程度」を指している。類似の概念には、sequence (O'Rand & Ellis, 1974) や differentiation (Ezekiel, 1968) がある。

4. direction (方向) これは extension と関連の深い概念であり、過去、現在、未来の3つの時間的領域の中で、どの領域に対する志向性が強いかということである。先ほど述べた predominance (Klinsberg, 1967; Teahan, 1958) という概念とも近いものであると思われる。

(2) 情緒的側面

1. time relatedness (時間関連性) 時間の統合性とも言うべきものであり、過去、現在、未来がどの程度関連性をもって捉えられ、かつ統合されているかを指している (Cottle, 1967)。

2. directionality (方向性) Knapp & Garbutt (1958) や Kastenbaum (1961) が用いた概念であり、「現在の瞬間から未来へと移行する感覚」を意味する。すなわち、時間の経過についての感覚のことである。

3. personal time perspective (個人的な時間的展望) Bortner & Hultsch (1972) が情緒的側面の時間的展望を示す概念として用いたものであり、希望のインデックスとしての protension と過去からの進歩のインデックスとしての retrotension とに分かれている。定義は既に述べてあるように、現在と過去、現在と未来の主観的評価の差のことである。

4. time attitude (時間的態度) 主に評定法によって検討されているものとして、time anxiety (時間不安), time competence (時間能力), time potency (時間潜在力), time evaluation (時間評価) がある。

5. affective meaning (情緒的意味) Bauer & Gillies (1972 a, b) は、未来におけるでき事の主観的意味を、評価 (evaluation) と潜在力 (potency) との積によってとらえようとしている。同様に、Sobel & McGuire (1977) は、未来におけるでき事に対する主観的満足度を、主観的生起確率 (subjective probability) と価値 (value) との積によって捉えようとしている。

6. その他 Ezekiel (1968) が伝記分析を通して考えた demand, agency や Israeli (1932-1933) の importance がある。

因子分析的研究を行うことによって、時間的展望の構造に関する検討がなされているので、その結果をまとめて示し、時間的展望の構造内の相互の関係について考えてみる。

Kastenbaum (1961) は story completion (extension), 12-common life event (density 1, coherence), Who

will you be? (density 2), Time Metaphor Test (directionality) を高校生 209 人に実施し、その結果を因子分析した。すると、directionality を除く他の 5 つの測度が一まとまりになった一般時間的展望因子が抽出され、3 尺度間の関連性が深いことが明らかになった。ところが、directionality は他の尺度と相関が低く、時間的展望の別の側面を測定していると考えられた。しかしながら、Ruiz, Reivich & Krauss (1967) が Time Reference Inventory, Incomplete Thought Test, Tell me a story, story completion, 過去 2 週間に考えたり話したりしたことを言う、の 5 課題で 9 指標をとり、大学生 45 人に実施した研究では異なる結果が得られている。すなわち、スピアマンの順位相関を算出したところ、9 指標間の相関が低く、今後の研究では 2 つ以上の尺度を用いるべきであるという提案がされている。Platt, Eisenmann, Delisser & Darbes (1971) は、時間的展望の次元の意味を理解することを目的として、Time Metaphor Test, Events Test, Impersonal Future Extension, Future Density I, II の 6 尺度とパーソナリティー特性 9 尺度、計 15 尺度からなる検査を大学生に実施した。男女別に因子分析を行い 6 因子を抽出したが、6 つの時間的展望の尺度間の関連はうすく、明確な時間的展望の因子といったものは確認されなかった。

以上のように、現在までのところ時間的展望の構造内における相互関連性は十分には解明されていないが、時間的展望は全体としてゆるやかな構造をなしていると考えられる。

2. 時間的展望の研究方法・技法

従来、時間的展望を研究するため、多くの技法が開発されてきた。小宮山 (1973 a) は投影的方法と質問紙法とに分け、Nuttin (1979) は形式的 (formelle) アプローチと具体的 (matérielle) アプローチとに分けているが、それらは認知的側面を主として研究する技法である。その他に、Hoonaert (1973) が示したような情緒的側面を研究するための技法もある。ここでは、時間的展望の研究技法を投映法的技法、でき事についての技法、情緒的側面を測定する技法、の 3 つに分けて考察する。

1) 投映法的技法

1 つの流れとして、tell-me-a-story (LeShan, 1952), story-completion (Brandt & Johnson, 1955), TAT (Teahan, 1958) など、自由にまたは導入のための文章や絵を見ながら物語を作るといった技法が古くから実施されてきた。この技法の短所には、用いられる刺激材料の絵画や文章によって結果が左右されやすいことがある。

また、物語の内容から時間的展望の指標を判断するのが難しく、研究者によって指標のとり方が多様であるという問題点を持っている。このように、この技法は妥当性という点で若干の問題はあるけれども、達成動機などと関連づけて分析ができることや時間的展望の内容分析が行えるなどの長所を持っている。

これ以外に、Cottle は一連の研究において、時間的展望を様々な側面から検討するための投映法的な技法を考案した。Circles Test (Cottle, 1967) は過去、現在、未来を円にたとえ、3 つの円を描かせるものであり、3 つの円の大きさや位置関係から time relatedness が明らかにされる。Circles Test の妥当性については、わが国においても、田中 (1974) や高橋 (1976, 1977, 1979) によって検討されている。Lines Test (Cottle & Pleck, 1969) は 1 本の棒を過去、現在、未来に分けさせ、その長さを指標とするものである。同様の手法は、Cohen (1967) によっても用いられている。Money Game (Cottle, 1969) は過去、現在、未来に対して支払う金銭の額から、それぞれに対する態度を測定しようとする技法である。Judson & Tuttle (1966) の six-multiple-choice questions も、ほぼ同様のねらいを持った技法である。なお、Cottle の用いた技法については、Cottle (1976) の中で、その背景も含めて詳しく論じられている。

Rockeach & Bonier (1960) は使用された動詞の時制の頻度分析を行い、Ruiz, Reivich & Krauss (1967) は Incomplete Thought Test による動詞の時制の分析をしている。これらは、得られた結果から過去、現在、未来のどの領域への志向性が強いかを検討する技法である。Rychlak (1972) は自由連想法を用いて被験者に連想反応をさせ、結果を独自の視点から分析している。

2) でき事についての技法

(1) 自発的な方法 (被験者が自由にでき事を言う方法)

Events Test (Wallace, 1956), Experiential Inventory (Cottle, 1968), Important Events (Kastenbaum, 1961), Personal Association (Wohlford, 1966), Social Time Perspective (O'Rand & Ellis, 1974) は、いずれも自分の将来に起きると思われるでき事を被験者が自由に数個から 10 個言う技法である。

Farnham-Diggory (1964) の Expectancy Questionnaire や Sobel & McGuire (1977) の研究では、実験者があらかじめ一定の時期 (例えば、5 年後や 10 年後など) を指定し、その時に自分の人生に何が起きるかを被験者に予想させ、その反応を求める技法が用いられている。

これらの技法は、個人が自分の将来にどのような種類のでき事が起きると考えているのかという、時間的展望

の内容を明らかにすることができ、またその時期を分析することができる。

Teahan (1958) は、最近 2 週間において被験者が考えたり、思ったりしたことを列挙する技法を用い、反応を分類した。類似したものには、Eson & Greenfeld (1962)、Cameron (1972) が用いた技法や勝俣 (1973) の Time Perspective Test がある。これらは、個人の日常生活の中から時間的展望を明らかにしようとする技法である。

これ以外のものには、Ezekiel (1968) の研究で使われた mock autobiography がある。これは、被験者に自分の将来の計画についての手記を書いてもらい、それを分析するものである。

(2) 実験者が用意した項目に解答する方法

1. 人生のでき事についての質問 個人の人生において起こりうる最も代表的、一般的なでき事（例えば、就職や結婚など）を準備し、被験者に対して、それらのでき事が自分の将来に生じるとかどうかの有無とその時の年齢とを質問する技法である。これには、Kastenbaum (1961) の common-life-events, Stein & Craik (1965) の Future Events Test, Q 分類を用いた Braley & Fred (1971) の Temporal Orientation がある。これらは、指標がはっきりしているの、分析が容易であるという特徴を持っている。

2. 文章完成法 これには大きく分けて、2 つのタイプがある。1 つは、Lessing (1968) の Incomplete Sentence Test（例：私が…歳になった時、私は…できる。の質問に対して自由に解答する）であり、前に述べた人生のでき事についての質問と似ている点がある。もう 1 つは、Nuttin (1964) の Sentence Completion Test, Roos & Albers (1965) の Time Reference Inventory（例：私が最も幸福なのは過去、現在、未来である。の質問に対してどれかに○をする）である。これらは、過去、現在、未来のどの領域に対する志向性が強いかを明らかにする。

3) 情緒的側面を測定する技法

1 つには、前述した Time Perspective (Bortner & Hultsch, 1972) や Future Events Questionnaire (Bauer & Gillies, 1972a; 1972b) のように、直接的に未来のでき事についての主観的態度を検討する技法がある。

他方には、質問紙法や SD 法によって情緒的側面を明らかにしようとする技法がある。リッカートタイプの質問紙法には、Time Metaphor Test (Knapp & Garbutt 1958), Attitude Scale (Goldrich, 1967), TP II スコア (Shybut, 1968), Temporal Attitude Inventory (Cottle, 1971), Future Time Perspective Inventory

(Lessing, 1972), Temporal Experience Questionnaire (Wessman, 1973), Inventory of Temporal Experience (Yonge, 1975), Future Time Orientation (Gjesme, 1979) がある。また、SD 法を用いて、過去、現在、未来に対する内包的意味を測定しようとする技法には、Cottle (1969), Menaham (1972), Lens (1975) がある。

3. 時間的展望に関する従来の研究の分類・整理

従来、時間的展望に関する研究は、一方では extension や density などの認知的側面を明らかにしようとする研究があり、他方では時間的態度や時間的意味空間などの情緒的側面を明らかにしようとする研究があり、これらの 2 つの方向から行われてきた。ここでは、それぞれの研究分野における従来の到達点について、要因ごとにまとめて概観する。

1) 認知的側面

1. 年齢 児童・青年を対象とした研究には、次のようなものがある。Wohlford & Herrera (1970) は、4・5・6 年生において extension に差がないという結果を得ている。しかしながら、その他の研究においては、年長の者の方が未来の extension が長く (Klinsberg, 1967; Lessing, 1972; Shannon, 1975), 過去の extension が長く (Cottle & Pleck, 1969), そして、density が大きい (Trommsdorff, Lamm & Schmidt, 1979) ことが明らかにされている。時間的展望の内容や統合の程度に関しては、Lessing (1968) が、5・8・11 年生において、学年が高いほど空想的な内容から現実的な内容へと変化していくことを示し、Cottle, Howard & Pleck (1969) の研究からは、年長の方がより time related であり、かつ年少の方が近い経験が多いことがわかっている。山中 (1970) は、中学校 2 年生と大学生において、将来のでき事の予想は社会や世の中に関することよりも自分に関することの方が多く、非希望的なものよりも希望的なものの方が多く、遠い将来のことよりも近い将来のことの方が多くことを示した。佐藤・豊島 (1979) は、普通高校と職業高校の高校 3 年生では時間的展望の内容が異なることや 1 年以内の近い将来の予想が両群ともに多いことを明らかにした。これらのことから、年齢が高くなるほど時間的展望は長くなり、その内容も現実的なものになると言えよう。

次に、青年と老人の時間的展望の長さや内容について検討した研究からは、以下のことが知られている。Kastenbaum (1963) は、66—89 歳の老人群は 18—24 歳の青年群よりも未来の extension が短いことを示した。しか

し、両群には cognitive futurity には差がみられなかった。Cameron (1972) は、18 歳から 70 歳以上までを対象に、年齢とともに未来志向的な思考が減少し、現在志向的な思考が増加することを見出した。Toban (1970) によれば、19—48 歳において、年齢の若いほど未来の extension が短いという逆の結果が得られているが、相関は $r=.37$ であり、それほど高くはない。これらの研究からは、青年は老人よりも時間的展望が長く、未来志向的であると言える。

2. 社会階層 LeShan (1952) が、8—10 歳の中流階層の子どもは低階層の子どもよりも、未来の extension が長いことを示して以来、多くの研究が行われてきた。Lessing (1968) は 5・8・11 年生で、Kendall & Sibley (1970) は 11—13 歳で、O'Rand & Ellis (1974) は大学生と職業訓練生との間に、Lamm, Schmidt & Trommsdorff (1976) は 14—16 歳で同様の結果を得ている。しかしながら、Judson & Tuttle (1966) の研究では、6 年生において両者に差はみられなかった。また、Cottle & Pleck (1969), Cottle et al. (1969) は、12—18 歳において上流階層は過去志向的で、中流階層は未来志向的であることを見出している。

Brim & Forer (1956) は高校生に人生設計についてインタビューし、その結果と父親の職業 ($P<.01$)、父親の教育水準 ($P<.01$) との間に有意な相関を得ている。これらの結果は、個人の時間的展望の長さは社会的環境の影響を受けて変化することを示している。

3. 非行 Barndt & Johnson (1955) は、非行児は正常児よりも未来の extension が短いことを示したが、同様な結果は、Davids, Kiddler & Reich (1962), Brock & Giudice (1963), Stein, Sarbin & Kulik (1968), Siegman (1961) によっても得られている。

Ricks, Umbarger & Mack (1964) は 15—17 歳の非行少年を 2 群に分け、実験群には 11 か月に及ぶ職業セラピーを実施し、その間何の指導も行わなかった統制群と比較したところ、実験群は統制群よりも未来の extension が長くなることを示した。普通の大学生においても、カウンセリングの効果は実証されている (Matulef, Warman & Brock, 1964)。

Megargee & Price (1970) は、正常児と非行児を単純に比較する従来の研究を批判する立場から、収容施設に入れられた非行少年が収容期間によって時間的志向性にちがいをみせるかどうかを検討した。すなわち、収容 1 週間後、6 か月後、出所 1 週間前の 3 群の時間的展望を比較し、3 群とも同一パターンで未来志向的であることを見出した。そこから、未来に焦点を当てたカウンセ

リングの必要性が強調されている。同様のことは、Landau (1976), Trommsdorff & Lamm (1980) の研究においてもみられ、非行経験と施設収容経験の 2 つの要因を別々に分離して検討することの必要性が示唆されている。また、Black & Gregson (1973) は 21—24 歳の正常者、初犯、常習犯の 3 群を比較し、正常者は未来志向的であるのに対して、初犯、常習犯は現在志向的であることを示している。これらのことは、非行を犯す者の時間的展望が短いということは必然的なものではなく、むしろカウンセリングなどによる治療教育が重要であることを示している。

4. 精神病理 精神分裂病患者などの時間、空間概念が崩壊しているという見解は古くから指摘されている。1950 年代までの研究については Orme (1962) が詳しく論じているが、その後の研究からは以下のようなことが明らかにされている。

Wallace (1956) は、精神分裂病患者の未来の extension が短く、coherence が低いことを見出した。Shybut (1968) は、中度精神分裂病患者は正常者よりも extension が短く、重度精神分裂病患者の extension はさらに短いことを示した。Foulks & Webb (1970) の研究では、慢性精神分裂病、アルコール中毒、うつ病、急性精神分裂病、正常の 5 群の比較が行われ、正常群にくらべて他の 4 群は extension が過去、未来ともに短く、慢性精神分裂病群は混乱した反応が多いことが示された。同じように、Roos & Albers (1965) は、アルコール中毒患者の未来の extension が正常者に比較して短いことを見出している。また、Dilling & Rabin (1967) は、精神分裂病患者や抑うつ病患者は正常者よりも extension が短く、coherence が低いことを示し、Braley & Freed (1971) は、神経症や精神病患者の extension が正常者よりも短いことを示している。勝俣 (1974) は、破瓜型分裂病患者は現在志向的であることを見出した。さらに、精神病患者と正常者との間には、時間的展望の内容の面においても差があることがわかっている (Farnham-Diggory, 1964; 1966)。このように、精神分裂病や神経症などの患者と正常者との間には、時間的展望の長さや質に差異があることが明らかになっている。しかし、精神分裂病と神経症とでは、未来の extension に差がないという結果が得られている (Stein & Craik, 1965)。

5. 性別 Platt & Eisenman (1969) は、大学生において、男子よりも女子の方が density が大きいことを示した。それに対して、Lamm et al. (1976) は、14—16 歳の男子は女子よりも職業についての density が大きいことを示し、Trommsdorff et al. (1979) は、14—16 歳

の男子の方が女子よりも職業についての extension が長いことを示した。これに関連して、大学生が自分の将来に起きると予想するでき事は、男子では進路や職業についてが多く、女子では家庭や育児についてが多いことが見出されている（都筑, 1981）。その他の研究では、15—16歳を対象にした Davids et al. (1962) は、男女間に未来の extension に差がないことを見出し、Wohlford & Herrera (1970) は、4・5・6年生において、女子は男子よりも過去の extension が長いという結果を得ている。Cottle, Pleck & Kakar (1968) は、13—20歳において、男子は女子よりも遠い未来のでき事が多く、未来志向的であることを示した。これらのことから、時間的展望の長さには性差はみられず、むしろ、その内容にちがいがあ、それは男女間の性役割の差異に関連しているのではないと思われる。

6. 人生の満足 Lessing (1972) は、人生に対する満足度と extension との関係を検討し、9—11歳では人生に満足していない者の方が未来の extension が長く、より空想的な色彩が強いものに対して、12—15歳では人生に満足している者ほど extension が長く、現実的な時間的展望であるという結果を得ている。この研究からは、人生に対する満足と時間的展望の長さとの関係は、年齢にともなって変化することが示されている。しかし、植田 (1980) の研究では、中学生と大学生において、自己満足度と過去、未来への志向性との間には明確な関係は見出されていない。

7. 学業成績 Teahan (1958) は、7・8年生で上位の成績の者は下位の成績の者よりも未来の extension が大きいことを示し、Lessing (1968) は、学業成績やIQの高い者ほど extension が長いことを見出した。Epley & Ricks (1963) は大学生において、O'Rand & Ellis (1974) は17—19歳において、学業成績の下位、中位、上位の順に未来の extension が長くなることを示した。また、小川・高橋・吉野・長塚 (1974) は、小学生男女、中学生男子において、高成績群の方が extension が長いという結果を得ている。以上の研究から、学業成績と時間的展望の長さとの間には正の関係があると言える。

8. パーソナリティ パーソナリティ特性と時間的展望との関係について検討した研究は数多くあり、様々なパーソナリティ特性が取り上げられている。

Locus of control の Internal な者と External な者とを比較した研究では、大学生において I タイプは E タイプよりも extension, density が大きいことが示されている (Platt & Eisenman, 1968)。同様の結果は、Robertson (1978) によっても得られている。

Klinsberg (1968) は、10—12歳において、満足の遅延群は即時群よりも現実的な時間的展望を持ち、未来志向的であることを示した。Mischel & Metzner (1962) は、幼児から小学校6年生において、満足の即時群は遅延群よりも extension が短い傾向にあることを見出した。ただし、Gjesme (1979) の研究では、達成動機にくらべて満足の遅延は2次的な要因であることが示されている。

Robertson (1978) は、大学生、大学院生で顕現性不安の高い者ほど extension が短いことを示した。同じく、Epley & Ricks (1963) は、大学生において、不安と未来の extension との間に .63 の相関を得ている。また、Rychlak (1972) は、不安の高い者ほど心理的な現在が長く、未来についてのステートメントが少なく、現在についてのステートメントが多いことを見出した。さらに、Rychlak (1973) は、MMPI の得点の高位群と普通群とを比較し、普通群は高位群よりもポジティブな未来のでき事を多く話すのに対し、逆に高位群はネガティブなでき事を多く話すという結果を得た。Ruiz & Krauss (1968) は、高不安群は現在や未来の時制をあまり使用しないことを示した。同じように、Krauss & Ruiz (1967 a, b) は、高不安の者ほど現実志向的で、未来のことはあまり考えないことを示した。Krauss, Mozdierz & Button (1967) は、現実場面において同様の傾向を見出している。これらの結果から、不安と時間的展望の長さとの間には負の関係があると言える。

Rokeach & Bonier (1960) は、Dogmatism Scale を用いて、独断主義 (dogmatism) と時間的展望との関係について検討している。その研究からは、closed system の人の方が open system の人よりも未来志向的であることがわかっている。しかし、Jacoby (1969) は、独断主義と未来の extension との間に有意な相関を認めることができなかった。

Ellis, Ellis, Mandel, Schaeffer, Sommer & Sommer (1955) の研究では、フラストレーション耐性と未来の extension との間には有意な関係は見られなかった。Platt & Taylor (1967) は、ホームシックにかかった大学生は extension が短いことを示した。

9. 比較文化的研究 Wohlford & Herrera (1970) は、9—13歳のアメリカ人はキューバ人よりも過去、未来の extension が大きいことを示した。Toban (1970) が14—48歳の黒人とプエルトリコ人を比較した研究では、両者にちがいはなかった。Meade (1971) は、大学生に story completion を実施し、アメリカ人はインド人よりも未来志向的な内容を多く述べるという結果を得た。同じく Heckel & Rajagopal (1975) が大学生を対象に行った

研究では、アメリカ人とインド人との間には extension や density などの差はみられたが、しかし、内容は類似していることが示された。Roberts & Greene (1971), Lessing (1971), Sheikh & Twerski (1974), Shannon (1975) は、アメリカ国内の人種の差について検討しているが、共通した結果は得られていない。Meade (1972) は、インド国内の 8 つの下位文化間の比較検討を行い、未来志向的で高い動機づけを持つ下位文化と過去志向的で低い動機づけを持つ下位文化とに 2 分されることを示した。以上のように、数多くの国民や人種を対象にした研究が行われているが、現在までのところ一貫した結果は得られていない。

2) 情緒的側面

1. 年齢 Bortner & Hultsh (1972), Hultsh & Bortner (1974) は、老人の時間的態度が 60 歳以後、過去志向的になっていくことを見出した。同じように、Tsien-Lee (1974) の研究でも、青年は老人よりも未来をポジティブに見て、現在をネガティブに見るという結果が得られている。勝俣 (1972) は、高校生・大学生と 30・40 歳との間には時間的認知の様式に差があることを示した。同様に、Menaham (1972) の研究からは、17—21 歳の青年群は 22—29 歳、30—39 歳、40 歳以上の成人群とは、過去、現在、未来の時間的意味空間において差異があることがわかっている。また、Wallach & Green (1961) は、老人は青年よりも swift な比喻を好むことを見出している。これらのことから、年齢ともなって時間的態度や意味空間は変化し、一般的に老人は青年よりも過去を志向するようになると言える。

2. 精神病理 Calabresi & Cohen (1968) は、大学生、精神病患者、神経症患者に 45 項目の性格に関する質問と 46 項目の時間に対する態度から成る質問紙を実施した。時間に対する態度を因子分析した結果、4 因子が抽出された。それぞれの因子について大学生と患者群とを比較したところ、次のような結果が得られている。時間不安 (time anxiety) は、患者群の方が大学生よりも大きく、時間の所有 (time possessiveness) と時間の流暢性 (time flexibility) は、逆に大学生の方が患者群よりも高かった。

Menahem (1972) は、17—21 歳の青年群と自殺未遂群とを SD 法の意味空間において比較し、自殺未遂群の評定値はネガティブであり、過去、現在、未来の相互の評定値間のズレが大きいことを見出した。

Meldman, Stein & Calsyn (1978) は、17—65 歳の外来患者の self-esteem と将来の見通しとの関係を検討し、両者は相補的な関係にあることを示した。

3. 性別 Lens (1975) の研究から、女性は男性よりも過去、現在、未来のいずれに対しても、よりポジティブであることが示されている。

4. パーソナリティ Thayer, Gorman, Wessman, Schmeidler & Mannuci (1975) は、大学生に Temporal Experience Questionnaire (Wessman, 1973) を実施し、Locus of control の Internal なタイプの人にはポジティブに、そして、External なタイプの人にはネガティブに反応するという結果を得ている。

小宮山 (1977) は大学生を満足の遅延型と即行型に分け、15 項目から成る時間に対する態度を評定させた。その結果、遅延群はポジティブな項目に対してはよりポジティブに反応し、ネガティブな項目に対してはよりネガティブに反応する傾向があり、両群の反応に差がみられることがわかった。

Cottle (1969) は、18—23 歳の男女において、顕現性不安と time relatedness との間には負の関係があり、顕現性不安と時間不安の間には正の相関があることを見出した。同様の結果は、Robertson (1978) の大学生、大学院生を対象にした研究においても示されており、顕現性不安は SD 法によって測定された時間評価 (temporal evaluation) および Time Competence Scale の時間能力 (time competence) とは負の関係にあることが明らかにされている。また、高木 (1981) は大学生に Temporal Experience Questionnaire (Wessman, 1973) を実施し、顕現性不安と現実的切迫感 (immediate time pressure)、不安定性 (personal inconsistency) との間には正の相関があり、顕現性不安と長期的方向性 (long-term personal direction)、時間活用性 (time utilization) との間には負の相関があることを示した。Knapp (1965) の研究からは、Eysenck Personality Inventory における高神経質群は、時間能力に関して低神経質群よりも劣るという結果が得られている。

Cottle (1971) は、18—23 歳で独断主義の人は時間に対する不安を示し、現在や未来にあまり重要性を認めず、過去への志向性が高いことを示した。しかしながら、Zurcher, Willis, Ikard & Dohme (1967) の研究では、Dogmatism Scale と未来志向性との相関は .39 ($P < .01$) であり、逆の結果になっている。

Baldo, Michael & Crandali (1975) は高校生、大学生を対象に、Erikson の発達段階の最初の 6 段階と Circles Test の関係を検討し、危機をポジティブに解決していることと time relatedness との間には正の関連が存在することを見出した。

5. 達成動機 達成動機と時間的態度との関連について

て最初に研究したのは、Knapp & Garbutt (1958) である。彼らは Time Metaphor Test を用いて、Dynamic-Hasty time imagery と n-achievement との間に正の相関があることを見出した。その後、Green & Knapp (1959) は時間に対する態度と達成動機との関連を示した。Cottle (1969) は、18—23 歳の医療衛生兵において、achievement value は time relatedness と正の相関があり、時間不安とは負の相関があることを見出した。また、Meade (1972) のインドの大学生の研究からも、時間的展望と動機とが深く関連していることがわかった。Yonge (1975) は Inventory of Temporal Experience を用いて、自己実現的価値、創造性、human & vital time の間に正の相関があることを示した。児童を対象にした研究において、Gjesme (1979) は、6 学年生を動機のタイプによって approach oriented motive と avoidance oriented motive の 2 群に分類して両群の差を検討したところ、達成動機と時間的展望とは正の関係があることが示された。以上の研究から、達成動機の高い者は時間的態度や展望がよりポジティブであると言える。

この他、小宮山 (1973 b, 1975) の研究からは、未来展望と生活感情、生活の満足度との間には関連があることがわかっている。また、落合 (1979) は、生き方のスタイルを人生の選択場面で困難な道を選ぶ克服型と容易な道を選ぶ安全型に分け、女子短大生において、安全型の方が将来についての見通しを持っている傾向にあることを明らかにした。

6. 時間的態度の構造 因子分析的手法を用いて、時間的態度の構造に関する検討が行われてきた。

Knapp (1962) は大学生 77 人に 13 項目の質問紙を実施し、時間の管理 (time servant-time master)、時間の効果的利用 (time efficacy-time obliviousness) の 2 因子を抽出した。Calabresi & Cohen (1968) の研究からは、時間不安 (time anxiety)、時間服従 (time submissiveness)、時間の所有 (time possessiveness)、時間の流暢性 (time flexibility) の 4 因子が見出されている。Wessman (1973) は、大学生に 201 項目の Temporal Experience Questionnaire を実施して 7 因子を抽出した。第 1 因子は Immediate Time Pressure、第 2 因子は Long-Term Personal Direction、第 3 因子は Time Utilization、第 4 因子は Personal Inconsistency、第 5 因子は Regretful Perseveration、第 6 因子は Nostalgic Review & Positive Anticipation、第 7 因子は Long Contemplative Temporal Span と名付けられている。この研究において抽出された因子と先にあげた Calabresi & Cohen の研究で得られた因子との間には、内容や意

味の面での完全な一致はないが、しかし、互いの共通度大きく、時間や時間的経験に対する基本的な意味のある態度を示していると考えられる。また、Gjesme (1979) の研究からは、Involvement, Anticipation, Occupation Speed の 4 因子が抽出されている。

わが国では、落合 (1980) が孤独感の内包構造としての時間的展望について検討し、20 項目から成る質問紙を大学生 110 名に実施した。その結果、「将来に対する展望の明暗」の因子と「展望の長短」の因子の 2 因子が抽出されている。

4. 結 語

従来の研究の分類・整理を通じて、時間的展望研究の中で最も多く行われてきたのは、extension についてであることが明らかになった。実際、どのような要因が時間的展望の長さという量的な側面に関連し、影響を与えるのかという点に関しては、かなりの研究成果が蓄積されている。そのことは、研究の発展という点から見た場合に非常に意味のあることではあるが、しかしながら、それは時間的展望の概念の一部分にしか過ぎない。現在のところ、理論的に語られている時間的展望の概念と実際の研究で明らかにされるものとの間にはギャップがあるように感じられる。すなわち、時間的展望研究にとって大切なことは、ある個人が自分の人生において、どのような内容の目標や希望を思い浮かべ、それに対していかなる意味づけをしているのか、という時間的展望の中身を明らかにすることであると考えられる。従来ほとんど取り上げられてこなかったこのような点を検討することによって、心理学的な未来が現実の行動に与える影響を具体的に明らかにしていくことが可能になると思われる。その点では、今後の研究は時間的展望の質的な側面を明らかにするような方向に進んでいかなければならない。

そのためには、現在までに開発されてきた数多くの研究技法について再検討してみる必要がある。例えば、筆者は大学生に Events Test を実施して、彼らの時間的展望の特徴を明らかにしようと試みたが、得られた結果からは、大学生が予想したでき事が彼らにとってどの程度意味のあることなのかという点に関して把握することができないということがわかった。それは Events Test の持っている限界であり、それを越えて研究を進めていくためには、技法それ自体を吟味しなければならない。現在までのところ、Kastenbaum (1965)、Wohlford (1968) 田中 (1974)、高橋 (1976, 1977, 1979) が投映法的技法についての若干の検討を行っているぐらいで、技法の妥

当性や信頼性そのものについての研究はほとんど手がつけられていないのが現状であり、今後の研究が望まれる。また、個人の目標や希望の内容をとらえるためには、実験者があらかじめ枠組を設定する技法だけではなく、mock autobiography (Ezekiel, 1968) や作文、生活綴方などのように、自由に意見や考えを表現させ、それを分析するといった方法も有効であるように思われる。

このような時間的展望の中身が明らかにされるようになれば、現代の青少年における特徴的な意識プロセスについての理解を深めることができるであろう。例えば、モラトリウムとかしらけとか呼ばれる現象は、彼らが自分の将来をどのように展望しているかということと密接に関連していると考えられる。すなわち、そのような意識現象の背景には、彼らが自分の将来について思い描くことができず、時間的展望がはっきりしないということか、あるいは、自分の将来が見えすぎてしまって、自分の選択の余地がないほど時間的展望が明確になってしまっていると考えているか、ということがあるように思われる。これらのことは、具体的には、今後の研究によって明らかにしていかなければならないが、時間的展望と自己意識との関連が示されることは確実であろう。百合草 (1981) は、青年における自己評価と時間的展望との関係について検討しているが、これからこのような研究が多くなっていくことが望まれる。

最後に、これからの研究課題として、もうひとつ述べておきたいのは、時間的展望の発達プロセスについての研究が今後なされていかなければならないということである。従来の研究から、年齢とともに時間的展望が長くなり、その内容が現実的になっていくことが明らかにされているが、対象となっているのは児童期以後であり、それ以前における発達の様相についてはあまりわかっていない。最初は全く現在だけに生きている乳児の段階から、どのようにして過去や未来が次第に分化していくのか、乳幼児期から児童期、青年期にかけて自分の将来についての見方、考え方がどのように発達していくのか、などについて明らかにしていく必要がある。これに関連して、Janet (1929) は人格の発達を身体的人格、社会的人格、時間的人格の3つから論じているが、時間的展望研究の発展は発達研究、人格研究にも寄与するところが大きいと考えられる。

引用文献

- Allport, G. W. 1950 *The individual and his religion*. New York: MacMillan.
- Baldo, R., Michael, H., & Crandali, J. 1975 Relations among psychological development, locus of control, and time orientation. *Journal of Genetic Psychology*, 126, 297-303.
- Barndt, R. J., & Johnson, D. M. 1955 Time orientation in delinquents. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 51, 343-345.
- Bauer, R., & Gillies, J. 1972 a Cognitive style and influence of success and failure on future time-perspective. *Perceptual & Motor Skills*, 34, 79-82.
- Bauer, R., & Gillies, J. 1972 b Measurement of affective dimension of future time perspective. *Perceptual & Motor Skills*, 34, 181-182.
- Black, W. A. M., & Gregson, R. A. M. 1973 Time perspective, purpose in life, extraversion and neuroticism in New Zealand prisoners. *British Journal of Social & Clinical Psychology*, 12, 50-60.
- Bortner, R. W. & Hultsch, D. F. 1972 Personal time perspective in adulthood. *Developmental Psychology*, 7, 98-103.
- Braley L. S., & Freed, N. H. 1971 Modes of temporal orientation and psychopathology. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 36, 33-39.
- Brim, O. G., & Forer, R. 1956 A note on the relation of values and social structure to life planning. *Sociometry*, 19, 54-60.
- Brock, T. C. & Giudice, C. D. 1963 Stealing and temporal orientation. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 66, 91-94.
- Calabresi, R., & Cohen, J. 1968 Personality and time attitudes. *Journal of Abnormal Psychology*, 73, 431-439.
- Cameron, P. 1972 The generation gap: time orientation. *Gerontologist*, 12, 117-119.
- コーエン 小野章夫・シズエ・クラン(訳) 1971 時間の心理——その正常と異常 協同出版 (Cohen, J. 1967 *Psychological time in health and disease*. Springfield, Illinois: Thomas)
- Cottle, T. J. 1967 The circles test: an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 31, 58-71.
- Cottle, T. J. 1968 The location of experience: a manifest time orientation. *Acta Psychologica*, 28,

- 129—149.
- Cottle, T. J. 1969 Temporal correlates of the achievement value and manifest anxiety. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 33, 541—550.
- Cottle, T. J. 1971 Temporal correlates of dogmatism. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 36, 70—81.
- Cottle, T. J. 1976 Perceiving time. New York: John Wiley & Sons.
- Cottle, T. J., Howard, P., & Pleck, J. 1969 Adolescent perceptions of time: the effect of age, sex, and social class. *Journal of Personality*, 37, 636—650.
- Cottle, T. J., & Pleck, J. H. 1969 Linear estimations of temporal extension: the effect of age, sex, and social class. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 33, 81—93.
- Cottle, T. J., Pleck, J., & Kakar, S. 1968 Time and content of significant life experiences. *Perceptual & Motor Skills*, 27, 155—171.
- Davids, A., Kidder, C., & Reich, M. 1962 Time orientation in male and female juvenile delinquents. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 64, 239—240.
- Dilling, C. A., & Rabin, A. I. 1967 Temporal experience in depressive states and schizophrenia. *Journal of Consulting Psychology*, 31, 604—608.
- Ellis, L. M., Ellis, R., Mandel, E. D., Schaeffer, M. S., Sommer, G., & Sommer, G. 1955 Time orientation and social class: an experimental supplement. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 51, 146—147.
- Epley, D., & Ricks, D. R. 1963 Foresight and hindsight in the TAT. *Journal of Projective Techniques*, 27, 51—59.
- Eson, M. E., & Greenfeld, N. 1962 Lifespace: its contents and temporal dimensions. *Journal of Genetic Psychology*, 100, 113—128.
- Ezekiel, R. S. 1968 The personal future and peace corps competence. *Journal of Personality & Social Psychology (monograph supplement)*, No. 2, Part 2.
- Farnham-Diggory, S. 1964 Self-evaluation and subjective life expectancy among suicidal and non-suicidal psychotic males. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 69, 628—634.
- Farnham-Diggory, S. 1966 Self, future, and time. A developmental study of the concepts of psychotic, brain-damaged, and normal children. *Monograph of the Society for Research in Child Development*, 31, No. 1 (Whole No. 103).
- Foulks, J. D., & Webb, J. T. 1970 Temporal orientation of diagnostic groups. *Journal of Clinical Psychology*, 26, 155—159.
- Frank, L. K. 1939 Time perspectives. *Journal of philosophy*, 4, 293—312. Cited by M. Wallace & A. I. Rabin Temporal experience. *Psychological Bulletin*, 1960, 57, p. 227.
- Gjesme, T. 1979 Future time orientation as a function of achievement motives, ability, delay of gratification, and sex. *Journal of Psychology*, 101, 173—188.
- Goldrich, J. M. 1967 A study in time orientation: the relation between memory for past experience and orientation to the future. *Journal of Personality & Social Psychology*, 6, 216—221.
- Green, H. B., & Knapp, R. H. 1959 Time judgment, aesthetic preference, and need for achievement. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 58, 140—142.
- Heckel, R. V., & Rajagopal, J. 1975 Future time perspective in India and American college students. *Journal of Social Psychology*, 95, 131—132.
- Hoornaert, J. 1973 Time perspective: theoretical and methodological considerations. *Psychologica Belgica*, 13, 265—294.
- Hultsch, D. F., & Bortner, R. W. 1974 Personal time perspective in adulthood: a time-sequential study. *Developmental Psychology*, 10, 835—837.
- Israeli, N. 1930/1931 Some aspects of the social psychology of futurism. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 25, 121—132.
- Israeli, N. 1932a The psychology of time. *Psychological Review*, 39, 486—491.
- Israeli, N. 1932b Wishes concerning improbable future events: reactions to future. *Journal of Applied Psychology*, 16, 584—588.
- Israeli, N. 1932/1933 The social psychology of time. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 27,

- 209—213.
- Israeli, N. 1933-1934 Measurement of attitudes and reactions to the future. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 28, 181—193.
- Israeli, N. 1935 Distress in the outlook of Lancashire and Scottish unemployed. *Journal of Applied Psychology*, 19, 67—69.
- Jacoby, I. 1969 Time perspective and dogmatism: a replication. *Journal of Social Psychology*, 79, 281—282.
- ジャネ 関計夫(訳) 1955 人格の心理的発達 慶応通信社 (Janet, P. 1929 *L'évolution psychologique de lapersonnalité*. Paris: Chahine)
- Judson, A. J., & Tuttle, C. E. 1966 Time perspective and social class. *Perceptual & Motor Skills*, 23, 1074.
- Kastenbaum, R. 1961 The dimensions of future time perspective: an experimental analysis. *Journal of Genetic Psychology*, 65, 203—218.
- Kastenbaum, R. 1963 Cognitive and personal futurity in later life. *Journal of Individual Psychology*, 19, 216—222.
- Kastenbaum, R. 1964 The structure and function of time perspective. *Journal of Psychological Researches*, 8, 97—107.
- Kastenbaum, R. 1965 The direction of time perspective: the influence of affective set. *Journal of General Psychology*, 73, 189—201.
- 勝俣暎史 1972 人生における時間場認知に関する研究(2)——高校生・大学生および成人の比較 日本心理学会第36回大会発表論文集, 398—399.
- 勝俣暎史 1973 時間的展望テスト(TPT)に関する研究(1)——TPTの構想と実施例 日本教育心理学会第15回総会発表論文集, 14—15.
- 勝俣暎史 1974 時間的展望テスト(TPT)に関する研究(Ⅱ)——破瓜型分裂病患者のTPT解釈例 日本心理学会第38回大会発表論文集, 478—479.
- Kendall, M. B., & Sibley, R. F. 1970 Social class differences in time orientation: artifact? *Journal of Social Psychology*, 82, 187—191.
- Klinsberg, S. L. 1967 Changes in outlook on the future between childhood and adolescence. *Journal of Personality & Social Psychology*, 7, 185—193.
- Klinsberg, S. L. 1968 Future time perspective and the preference for delayed reward. *Journal of Personality & Social Psychology*, 8, 253—257.
- Knapp, R. H. 1962 Attitudes toward time and aesthetic choice. *Journal of Social Psychology*, 56, 79—87.
- Knapp, R. H. 1965 Relationship of a measure of self-actualization to neuroticism and extraversion. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 168—172.
- Knapp, R. H., & Garbutt, J. T. 1958 Time imagery and the achievement motive. *Journal of Psychology*, 26, 426—434.
- 小宮山要 1973 a 青年の時間的展望に関する研究 青年心理学会(編) わが国における青年心理学の発展 金子書房 pp.125—150.
- 小宮山要 1973 b 青年の時間的展望に関する研究(第1報) 高校生の未来の展望の明暗と生活意識との関係 日本心理学会第37回大会発表論文集, 234—235.
- 小宮山要 1975 青年の時間的展望に関する研究(第2報) 大学生の未来の展望の明暗と生活との関係 日本心理学会第39回大会発表論文集, 510.
- 小宮山要 1977 大学生の時間的展望に関する研究 欲求充足の即行型と遅延型について 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 220—221.
- Krauss, H. H., Mozdierz, G. J., & Button, A. J. 1967 Anxiety and temporal perspective among normals in stressful life situation. *Psychological Reports*, 21, 721—724.
- Krauss, H. H., & Ruiz, R. A. 1967 a Anxiety and temporal perspective. *Journal of Clinical Psychology*, 23, 340—342.
- Krauss, H. H., & Ruiz, R. A. 1967 b Anxiety and temporal perspective. *Journal of Clinical Psychology*, 23, 454—455.
- Lamm, H., Schmidt, R. W., & Trommsdorff, G. 1976 Sex and social class as determinants of future orientation (time perspective) in adolescents. *Journal of Personality & Social Psychology*, 34, 317—326.
- Landau, S. F. 1976 Delinquency, institutionalization, and time orientation. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 44, 745—759.
- Lens, W. 1975 Sex differences in attitudes towards personal past, present, and future. *Psychologica*

- Belgica*, 15, 29—33.
- LeShan, L. L. 1952 Time orientation and social class. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 47, 589—592.
- Lessing, E. E. 1968 Demographic, developmental, and personality correlates of length of future time perspective (FTP). *Journal of Personality*, 38, 183—201.
- Lessing, E. E. 1971 Comparative extension of personal and social-political future time perspective. *Perceptual & Motor Skills*, 33, 415—422.
- Lessing, E. E. 1972 Extension of personal future time perspective, age, and life satisfaction of children and adolescents. *Developmental Psychology*, 6, 457—468.
- レヴィン 末永俊郎(訳) 1954 時間的展望とモラル K. レヴィン 社会的葛藤の解決 東京創元社 pp. 134—164. (Lewin, K. 1942 *Time perspective and moral*. New York: Houghton Mifflin)
- レヴィン 猪股佐登留(訳) 1974 社会科学における場の理論 誠信書房 (Lewin, K. 1951 *Field theory and social science*. New York: Harper)
- マスロー 上田吉一(訳) 1964 完全なる人間 誠信書房 (Maslow, A. H. 1962 *Toward a psychology of being*. Van Nostrand)
- Matulef, N. J., Warman, R. E., & Brock, T. C. 1964 Effects of brief vocational counseling on temporal orientation. *Journal of Counseling Psychology*, 11, 352—356.
- Meade, R. D. 1971 Future time perspectives of college students in America and India. *Journal of Social Psychology*, 83, 175—182.
- Meade, R. D. 1972 Future time perspectives of Americans and subcultures in India. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 3, 93—99.
- Megargee, E. I., & Price, A. C. 1970 Time orientation of youthful prison inmates. *Journal of Counseling Psychology*, 17, 8—14.
- Meldman, M. J., Stein, G. M., & Calsyn, R. J. 1978 Does personal future outlook cause self-esteem? *Journal of Clinical Psychology*, 34, 195—199.
- Menahem, R. 1972 L'espace sémantique temporel à différents âges de la vie et sa destruction lors d'une crise suicidaire. *L'année Psychologie*, 72, 353—377.
- Mischel, W., & Metzner R. 1962 Preference for delayed reward as a function of age, intelligence, and length of delayed interval. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 64, 425—431.
- Nuttin, J. 1964 The future time perspective in human motivation and learning. *Acta Psychologica*, 23, 60—82.
- Nuttin, J. 1979 La perspective temporelle dans le comportement humain. In *Du temps biologique au temps psychologique*, Symposium de l'Association de Psychologie de Langue Française (Poitiers, 1977) Paris: PUF pp. 307—363.
- 落合良行 1980 孤独感の内包的構造としての時間的展望に関する解析 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 204—205.
- 落合幸子 1979 生き方のスタイルに関する研究 —— 人生の選択場面での選択の様式における個人差 —— 筑波大学心理学研究, 1, 54—62.
- 小川隆章・高橋君江・吉野貞慶・長塚和彌 1974 小中学生の想像物語にみられる time perspective と学業成績, 達成動機との関係 日本教育心理学会第16回総会発表論文集, 144—145.
- O'Rand, A., & Ellis, R. A. 1974 Social class and social time perspective. *Social Forces*, 53, 53—63.
- Orme, J. E. 1962 Time studies in normal and abnormal personalities. *Acta Psychologica*, 20, 285—303.
- Platt, J. J., & Eisenman, R. 1968 Internal-external control of reinforcement, time perspective, adjustment, and anxiety. *Journal of General Psychology*, 79, 121—128.
- Platt, J. J., & Eisenman, R. 1969 Birth order and sex differences in future time perspective. *Developmental Psychology*, 1, 70.
- Platt, J. J., Eisenman, R., Delisser, O., & Darbes, A. 1971 Temporal perspective in college students: a re-evaluation. *Perceptual & Motor Skills*, 33, 103—109.
- Platt, J. J., & Taylor, R. E. 1967 Homesickness, future time perspective, and the self concept. *Journal of Individual Psychology*, 23, 94—97.
- Ricks, D., Umbarger, C., & Mack, R. 1964 A measure of increased temporal perspective in successfully treated adolescent delinquent boys. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 69,

- 685—689.
- Rizzo, A. E. 1967 The time moratorium. *Adolescent*, 2, 469—480.
- Roberts, A. H., & Greene, J. E. 1971 Cross-cultural study of relationships among four dimensions of time perspective. *Perceptual & Motor Skills*, 33, 163—173.
- Robertson, S. A. 1978 Some personality correlates of time competence, temporal extension and temporal evaluation. *Perceptual & Motor Skills*, 46, 743—750.
- Rokeach, M., & Bonier, R. 1960 Time perspective, dogmatism, and anxiety. In M. Rokeach (Ed) *The open and closed mind*. New York : Basic Books pp.366—375.
- Roos, P., & Albers, R. 1965 Performance of alcoholics and normals on a measurement of temporal orientation. *Journal of Clinical Psychology*, 21, 34—36.
- Ruiz, R. A., & Krauss, H. H. 1968 Anxiety, temporal perspective and item content of the incomplete thoughts test (ITT). *Journal of Clinical Psychology*, 24, 7072.
- Ruiz, R. A., Reivich, R. S., & Krauss, H. H. 1967 Tests of temporal perspective : do they measure the same construct ? *Psychological Reports*, 21, 849—852.
- Rychalk, J. F. 1972 Manifest anxiety as reflecting commitment to the psychological present at the expense of cognitive futurity. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 38, 70—79.
- Rychalk, J. F. 1973 Time orientation in the positive and negative free phantasies of mildly abnormal versus normal high school males. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 41, 175—180.
- 佐藤興一・豊島義明 1979 高校三年生（後期）の時間的展望について 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 514—515.
- Shannon, L. 1975 Development of time perspective in three cultural groups : a cultural difference or an expectancy interpretation. *Developmental Psychology*, 11, 114—115.
- Sheikh, A., & Twerski, M. 1974 Future-time perspective in Negro and White adolescents. *Perceptual & Motor Skills*, 39, 308.
- Shybut, J. 1968 Time perspective, internal vs. external control and severity of psychological disturbance. *Journal of Clinical Psychology*, 24, 312—315.
- Siegmán, A. W. 1961 The relationships between future time perspective, time estimation, and impulse control in a group of young offenders and in a control group. *Journal of Consulting Psychology*, 25, 470—475.
- Sobel, R., & McGuire, H. 1977 Time perspective and longitudinal tests of a cognitive model of satisfaction. *Journal of General Psychology*, 96, 177—184.
- Stein, K. B., & Craik, K. H. 1965 Relationship between motoric and ideational activity preference and time perspective in neurotics and schizophrenics. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 460—467.
- Stein, K., Sarbin, T. R., & Kulik, J. 1968 Future time perspective : its relation to the socialization process and the delinquent role. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 32, 257—264.
- 高木猛男 1981 時間体験に関する研究(1) — Manifest Anxiety との関連について — 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 764—765.
- 高橋君江 1976 サークルテストの妥当性 日本教育心理学第18回総会発表論文集, 372—373.
- 高橋君江 1977 サークルテストについて — 信頼性と妥当性の若干の検討 — 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 218—219.
- 高橋君江 1979 サークルテストの妥当性の検討 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 540—541.
- 田中良子 1974 サークルテスト — 過去, 現在, 未来にたいする認知とパーソナリティ 日本心理学会第38回大会発表論文集, 518—519.
- Teahan, J. E. 1958 Future time perspective, optimism, and academic achievement. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 57, 379—380.
- Thayer, S., Gorman, B. S., Wessman, A. E., Schmeidler, G., & Mannucci, E. G. 1975 The relationship between locus of control and temporal experience. *Journal of Genetic Psychology*, 126, 275—279.
- Toban, E. V. 1970 Relation between future time perspective, age, and militancy. *Journal of Genetic Psychology*, 116, 63—68.

- Trommsdorff, G., & Lamm, H. 1980 Future orientation of institutionalized and noninstitutionalized delinquents and nondelinquents. *European Journal of Social Psychology*, 10, 247—278.
- Trommsdorff, G., Lamm, H., & Schmidt, R. 1979 A longitudinal study of adolescents' future orientation (time perspective). *Journal of Youth & Adolescence*, 8, 131—147.
- Tsien-Lee, M. 1974 Attitudes towards past, present, and future among Chinese subjects. *Psychologica Belgica*, 14, 297—312.
- 都筑 学 1981 大学生における時間的展望の研究 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 424—425.
- 植田千晶 1980 青年の自己満足度と過去および未来との関係 日本心理学会第44回大会発表論文集, 451.
- Wallace, M. 1956 Future time perspective in schizophrenia. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, 52, 240—245.
- Wallace, M., & Rabin, A. I. 1960 Temporal experience. *Psychological Bulletin*, 57, 213—236.
- Wallach, M. A. & Green, L. R. 1961 On age and the subjective speed of time. *Journal of Gerontology*, 16, 71—74.
- Wessman, A. E. 1973 Personality and the subjective experience of time. *Journal of Personality Assessment*, 37, 103—114.
- Wohlford, P. 1966 Extension of personal time, affective states, and expectation of personal death. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 559—566.
- Wohlford, P. 1968 Extension of personal time in TAT and story completion stories. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 32, 267—280.
- Wohlford, P., & Herrera, J. A. 1970 TAT stimulus-cues and extension of personal time. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 34, 31—37.
- 山中忠茂 1970 時間判断法による青年の前途展望の研究 教育心理学研究, 18, 48—56.
- Yonge, G. D. 1975 Time experiences, self-actualizing values, and creativity. *Journal of Personality Assessment*, 39, 601—606.
- 百合草禎二 1981 現代青年の自己評価と時間的展望について 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 504—505.
- Zurcher, Jr. L. A., Willis, J. E., Ikard, F. F., & Dohme, J. A. 1967 Dogmatism, future orientation, and perception of time. *Journal of Social Psychology*, 73, 205—209.

(1981年7月31日受稿)